

小学校第 5 学年社会科 学習指導案

奈良教育大学教職大学院
池本 翔真

1. 単元名 これからの食料生産とわたしたちの食
— 今注目されている「地産地消」ってなんだろう? —

2. 単元の目標

- ・食料生産に関する様々な資料を読み取る活動を通して、日本の食料生産には様々な問題があり、解決のために生産者や消費者が様々な取り組みを進めていることを理解することができる。 (知識及び技能)
- ・食料生産に関する問題とそれに対する取り組みについて考え、取り組みのひとつである「地産地消」の価値を多面的・多角的に捉えて、まとめることができる。 (思考力・判断力・表現力等)
- ・食料生産の問題やそれに対する取り組みについて意欲的に調べ、持続可能な食料生産の実現に向けて、自分たちにできる具体的な方策を意欲的に考えたりする。 (学びに向かう力・人間性等)

3. 単元について

教材観

本単元は、小学校学習指導要領(平成 29 年告示)の第 5 学年の内容(2)に基づいて設定し、農業や水産業等、日本国内の食料生産に関する学習のまとめとして位置付ける。

日本の食料自給率は年々低下し続け、令和 5 年度の時点で約 38%(カロリーベース)となっている。諸外国と比較しても低い水準であるが、その背景には食生活の変化(洋食化)や気候変動、水産資源の減少、生産者の減少・高齢化等による食料の生産性低下等の様々な要因が絡み合っている。世界で人口増加や異常気象、飼料・肥料・燃料の価格上昇、輸入食品の価格上昇により、安定した食料の輸入に対する不安は大きく、食料自給率の低下は課題であるといえる。それに加え、環境の視点からはフードマイレージ(食料の輸送による二酸化炭素の排出による環境負荷)の問題もある。そのような問題に対して、生産者の側では、国内での食料の生産性向上を目指した取り組みが進められている。例えば、水産物の資源管理を通じた水産資源を守る取り組みや ICT・スマート技術を導入して生産を効率化する取り組み、生産者が自ら生産物を加工して販売して収入を増やす 6 次産業化の取り組み等である。

一方、消費者の側では、できる限り地元(日本国内)で生産された食料を購入する「地産地消(国産国消)」の取り組みが注目されている。農林水産省の調査によると、消費者の約 75%が普段の食品等を一般的な食品スーパーで購入しており、「スーパーマーケット」が中心になっている。2025 年度版の「スーパーマーケット白書」によると、スーパーマーケットの売上高は近年概ね横ばいで推移している(年間におよそ 12 兆円規模)。一方で、地元の生産物を取り扱う「産地直売所」の売上高は令和 3 年度から 4 年度にかけて、4.0%増加して、約 1.1 兆円規模に成長している。また、店舗数はスーパーマーケットも産地直売所も 2 万店前後となっており、消費者から一定の支持を受けているといえる。

地産地消(国産国消)や産地直売所が持つ価値について整理すると、以下の点が挙げられる。

- ・新鮮で美味しい…消費者の手元に届くまでの時間が短い。無農薬・有機栽培の生産物も多い。
- ・安全…生産者の顔が見える等の「情報の透明性(トレーサビリティ)」がある。
- ・食品ロスの削減…市場に出回らない規格外品の販売が可能である。
- ・環境…輸送時の二酸化炭素排出量が削減される。地域の自然環境の保全にもつながる。
- ・旬…旬のものに安くアクセスできる。
- ・地域経済…農家の所得向上や雇用創出が期待できる。
- ・地域のつながり…地域住民のコミュニケーションの場となる。

上記以外の価値も様々あると考えられる。スーパーマーケットには地元では生産できない農産物を販売していたり、加工品や総菜品等を含め、同じ商品でも様々なメーカーの製品を扱っていたりするという価値があることは豊かな食生活を支えるうえで大切であるが、コンビニエンスストアや EC サイト等でも多く食料が販売されるようになり、消費者の購入ルートが多様になるなか、値段だけではなく、健康や地球環境、食料自給率など多様な観点から、産地直売所(地産地消)の価値を知り、考えを深めることは意義がある。

児童観

(注) 事前アンケートは実際にある小学校において「これからの食料生産」学習前の第 5 学年の児童に行ったものである。(31 名が回答。)

本学級の児童は、学校での給食に関連して、午前中から休み時間に献立表を確認したりする姿や、給食中に各教室を巡回している栄養教諭が持っている、その日の給食に使われた食品をカードにしたものを見せてもらったりする姿が見られる。給食も毎日の食事の一環であるが、その食事を楽しんでいるようである。

児童に単元学習前の事前アンケート^(注)を行った。はじめに、これまでに食料の産地について意識したことがあるかについて尋ねたところ、「とても意識している。」「少し意識している。」と回答した児童が約 65%、「あまり意識していない。」「ぜんぜん意識したことがない。」と回答した児童が約 35%となった。このことから、食料の産地に対しての意識は一定あると考えられる。

続いて、食料を購入する際の決め手にすることは何かを記述式で尋ねたところ、「値段(安さ)」「賞味期限」が多く見られたほか、一部の児童の記述で「安心」「生産地」「おいしい」「新鮮」という言葉も見られた。児童が普段、自分で買い物をしたり、保護者の買い物に付き添ったりする機会がどのくらいあるのかはわからないが、持続可能な食と農に対する意識は児童も保護者も低いのではないかと考えられる。

指導観

本単元は、日本の食料自給率が低下しているという問題意識を持たせたうえで、その背景には生産者側の問題(食料生産がかかえる働き手の高齢化や減少、資源の減少)と消費者側の問題(食生活の変化、食料の選び方)の 2 側面があること確認したうえで、2 つの学習問題を立て、それぞれでどのような取り組みが進められているかについて学習を進める。

学習問題①「食料生産の問題を解決するために、生産者はどのような取り組みをしているのだろうか。」
 の解決に向けては、生産側の具体的な取り組みについて学習する。教科書で示されている「水産資源の管理」「農業の最新技術」「6次産業化」の 3 つのテーマを取り上げる。児童が意欲的に調べ活動に取り組むことができるよう、ジグソー法を活用し、グループを編成後、自分の担当するテーマについて調べ活動を行い、グループ内で共有するようにする。

消費側の取り組みについて考えるにあたっては、児童にとってもなじみがあるであろう「買い物」に着目し、児童や保護者の人が普段の食料の購入場所や選ぶときの決め手を共有した後に、近年「産地直売所」が注目され、スーパーマーケットの売上が近年ほぼ横ばいである一方で、産地直売所の売上が伸びていることを伝え、**学習問題②「産地直売所で食料を買う人がどうして増えているのだろうか。」**を設定する。学習問題②の解決に向けては、平群町にある道の駅内の産地直売所に実際に見学に行く。第3学年でのスーパーマーケットの学習を振り返らせつつ、実際の売り場を見たり、産地直売所で働く人やお客さん、野菜等を運んでくる生産者の人に話を聞いたりするなかで、産地直売所や地産地消の良さについて知る。見学後は、消費側、生産側それぞれの視点で産地直売所や地産地消の価値について整理することで、多面的に価値を捉えられるようにしたい。2つの学習問題の解決を踏まえ、最終時には消費側としての自分自身でできる行動について考える。

また、本単元は、総合的な学習の時間とも関連して進める。総合的な学習の時間では、本単元の学習を踏まえつつ、王寺町で開かれている朝市について学習し、朝市をよりよくする方法を提案する活動を行う予定である。朝市は隔週土曜日に町内のお年寄りが自分自身で育てた野菜や果物等を安く販売している。朝早くから無農薬・有機栽培で育てられた美味しい野菜を求め、地域の方が買いに来る姿が見られる。本単元で平群町の産地直売所を見学して整理した産地直売所や地産地消の価値についての理解を、王寺町の朝市について考えるなかで、価値判断する場面で活用できるようにしたい。(全15時間ほどを想定)

【王寺町で開かれている朝市の様子】

※写真(左)は一部加工。



ESD との関連

○本学習で働かせる ESD の視点(見方・考え方)

- ・**相互性**…地産地消の取り組みは、生産者と消費者が相互に支えあう関係を築くことができる良さがある。
- ・**責任性**…豊かな食生活を守るために、消費者も買い物等の身近なところから考えることが大切である。

○本学習で育てたい ESD の資質・能力

- ・**批判的に考える力**…自らの買い物を見つめ直し、持続可能な食料生産や豊かな食生活がこれからも続けられるのか問い直すことができる。
- ・**多面的・総合的に考える力**…地産地消や産地直売所の価値を多面的に捉えることができる。

○本学習で変容を促す ESD の価値観

- ・**世代間の公正**…食料生産と豊かな食生活を、次の世代につないでいくことが大切である。

○達成が期待される SDGs

- ・【11】住み続けられる街づくりを
- ・【12】つくる責任 つかう責任



4. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<p>① 様々な食料生産の問題や消費者の食生活等の変化により、日本の食料自給率が低下していることを理解している。</p> <p>② 生産者は、食料生産の問題を解決するための取り組みをしていることを理解している。</p> <p>③ 産地直売所には、地元の生産者の人が作った新鮮でおいしい野菜や果物を目当てに買いに来る人(消費者)がいることを理解している。</p>	<p>① 食料生産に関する問題とそれに対する取り組みについて考え、まとめている。</p> <p>② 産地直売所や産地消費の価値を多面的・多角的に捉え、まとめている。</p>	<p>① 食料生産の問題やそれに対する取り組みについて意欲的に調べている。</p> <p>② 持続可能な食料生産の実現に向けて、自分たちにできる具体的な方策を意欲的に考えている。</p>

5. 単元の指導計画(全9時間+社会見学2時間)

次	主な発問(【】)・獲得させる知識(⇒)	主な学習活動(○)・留意点(・)	評価(・)
1	<p>【1】実際のスーパーマーケットでは、どのような産地の食料が売られているのだろうか。 ⇒わたしたちが食べるものは、日本国内だけでつくられたものだけではなく、世界中の様々な国から輸入されている。また、年々輸入が増えており、日本の食料自給率が低下している。</p> <p>【2】食料自給率が低いと、わたしたちはどのようなことに困るのだろうか。 ⇒海外からの輸入が急にとまったり、日本で作られた生産物が売れなくなって農業をする人が減ってしまったりして、食料を安定して手に入れられなくなる。</p>	<p>・事前に保護者との買い物のなかで食料の産地や認証マーク、ほかに書かれている情報をまとめさせておく。</p> <p>・導入として、地元の朝市のかぼちゃと輸入のかぼちゃを提示し、どちらを食べたいかを考えさせ、その理由について整理し、本時の問いにつなげる。</p> <p>○食料の輸入の状況や、主な食料の自給率の変化について、教科書の資料やスーパーマーケットのチラシ、保護者との買い物調べから読み取る。</p> <p>○食料自給率が低いことのリスクについて、インターネットで調べたり、提示する「ジュニア農林水産白書」等の資料から読み取ったりする。</p> <p>・食料は誰にとっても常に必要なものであることを押さえ、食料を安定して手に入れられる意義を捉えさせる。</p>	

	<p>【3】日本の食料自給率は、どうして低いのだろうか。</p> <p>⇒生産量や漁獲量の減少、働く人の減少や高齢化といった日本の食料生産の問題や私たちの食生活や食料の選び方により、食料の輸入が増えているからである。</p>	<p>○日本の食料自給率が低い理由について、教科書の資料を読み取って整理する。</p> <p>・食料自給率が低い背景には、生産側の問題と消費側の問題があることを捉えさせ、学習問題を設定する。</p>	<p>・ア-① (ノート)</p> <p>・ウ-① (観察)</p>
<p>【学習問題①】 食料生産の問題を解決するために、生産者はどのような取り組みをしているのだろうか。</p>			
2	<p>【4】【5】日本の食料生産の問題を解決するために、生産者の人はどのような取り組みをしているのだろうか。</p> <p>⇒生産者は、魚を取りすぎないように管理したり、さいばい漁業をしたりして、限りある水産資源を守る取り組みをしている。</p> <p>⇒生産者は、インターネットや最新のスマート技術を活用したりして、少ない人でも効率的に品質の高い生産をする取り組みをしている。</p> <p>⇒生産者は、生産だけでなく、加工や販売までおこなう6次産業化を進め、収入を増やす取り組みをしている。</p>	<p>○「水産資源の管理」「農業の最新技術」「6次産業化」の3つのテーマを調べ、共有する。(ジグソー法)</p> <p>・各テーマについて、教科書を読み取らせ、疑問に思ったことを資料集やインターネットを用いて、さらに調べるように促す。</p>	<p>・ア-② (ノート)</p> <p>・イ-① (ノート)</p>
<p>【学習問題①の解決】 生産者は、食料生産の問題を解決するために、水産資源を保護したり、最新の技術を使って効率的に生産したり、自分たちの収入を増やす取り組みをしている。</p>			
3	<p>【6】わたしたちはふだん、どのように食料を選んでいるのだろうか。</p> <p>(買う場所)・スーパーマーケット ・コンビニエンスストア・ECサイト等</p> <p>(決め手)・値段・品質・安全性 ・産地・鮮度・季節や旬・量等</p>	<p>○普段の自分たちの食料の買い物を見つめなおし、食料の買う場所や決め手について出し合う。</p> <p>・第3時で、食料自給率が低い背景に、消費者側の問題があったことを振り返らせる。</p> <p>・食料を買う場所として、産地直売所の売上が伸びていることを示して、産地直売所が注目されていることを捉えさせ、学習問題を立てる。</p>	
<p>【学習問題②】 産地直売所で食料を買う人がどうして増えているのだろうか。</p>			

	<p>【7】～【8】平群町にある産地直売所はどのような場所なのだろうか。</p> <p>⇒【7】産地直売所で消費者は、地元で生産された新鮮で美味しい旬の野菜や果物を適正な価格で買うことができ、地域の農業の活性化にもつながる。</p> <p>⇒【8】産地直売所で生産者は、スーパーマーケット等の市場では売ることが出来ない、めずらしい種類の作物や規格外品を売ることができる。また、お客さんと直接話ができる。</p> <p>【平群町の産地直売所の様子】</p>  	<p>○平群町の道の駅「大和路へぐり」のパンフレットやロコミを見て、見学に向けて質問を考える。</p> <p>○実際に産地直売所を見学し、お客さんや道の駅で働く人、生産者の人に聞き取りをする。</p> <p>○見学で見たこと・聞いたことをもとに産地直売所の良さについてまとめる。</p> <p>・第 7 時は消費者の視点で考えて学習問題②を解決し、第 8 時では生産者の視点でも考え、多角的に地産地消や産地直売所の価値を捉えられるようにする。</p>	<p>・ア-③ (ノート)</p> <p>・イ-② (ノート)</p>	
4	<p>【学習問題②の解決】</p> <p>産地直売所には、地元の生産者の人が作った新鮮でおいしい野菜や果物を買うことを目当てに買いに来ている。</p>	<p>【9】日本の食料生産とわたしたちの食生活のために、わたしたちは何ができるだろうか。</p> <p>・食料を選ぶときには少しでも地元でつくられたものを選びたい。(選ぶようにおうちの人に伝えたい。)</p> <p>・和食(日本で作られたものを多く使う食事)をする機会を増やしたい。</p> <p>・食品ロスがないように家でも気を付けたい。</p>	<p>○日本の食料生産と自分たちの食生活のために出来る行動を考える。</p> <p>・食料生産と自分たちの食生活を持続可能なものにするという視点で考えさせる。</p> <p>・学習をまとめ、第 3 時で消費側の問題(食生活の変化, 食料の選び方)があったことを振り返らせる。</p>	<p>・ウ-② (発表)</p>

指導：藏前拓也(王寺町立王寺北義務教育学校)